

真知子

04決意

エリ

エプロン姿の真知子が、台所に立っている。

コンロでは、白く濁った鶏ガラのスープが弱火で温められている。

まな板の上のしいたけを手に取り、十字に切り込みを入れていく真知子。

鶏肉と茹でた白菜の盛られたお皿の上に、しいたけが並んでいく。

* * *

北風が吹き荒れ、太陽は薄い雲に隠されている。

寒さに震えながら、閑静な住宅街を歩く保夫。

5階建てのビルの前に立ち、玄関チャイムを押そうとする。

呼び出し音が鳴り、胸ポケットから端末を取り出す保夫。

画面には、美也の文字。

「もう着いた？」

「今、玄関前に来たところだ」

「あの話、どうするつもりなのか気になって」

「確証が得られるまで言わないつもりだ」

「そう、そのほうがいいかもね。真知子さんによろしく」

「ああ、切るよ」

端末を胸ポケットにしまう保夫。

玄関チャイムを鳴らす。

* * *

鏡の前に立ち、エプロンはずす真知子。服を直し、髪を整え、口紅を塗りなおす。

玄関チャイムがなる。

小走りで玄関に向かう真知子。

* * *

リビングでは、鶏の水炊きの用意が整っている。

カセットコンロに火をつける真知子。

「お腹がすいたでしょう？ さあ、食べましょう」

差し向かいに座り、食事を始める真知子と保夫。

「真知子さんの料理は、いつ食べてもおいしい。占い師ではなく、料理人になっても成功したんじゃないかな」

「占いは仕事、料理は趣味。好きな人のために、手間をかけて作るから楽しいのよ。ここにいる間だけは、保夫さんの恋人でいさせてちょうだい。ただ話し相手になってくれればいいのよ」

にっこりと保夫に笑いかける真知子。

黙ってうなづく保夫。

「鶏の水炊きはね、お母さまとの思い出の味なの。特別な日に食べさせてくれた。雄馬さまが悪い人だったことは今は分かっている。それでも憎みきれない。子どものころのわたしは、手伝い

で忙しかったけれど、幸せだった。あんな幸せもうわたしにはこない」

「そんなことないよ。真知子さんはみんなに必要とされているじゃないか」

「みんな自分のことが知りたいだけで、わたしでなくても構わない。贅沢な悩みかもしれない。でも自由区でお金に頼って暮らしている人はみんな、多かれ少なかれ、感じる孤独じゃないかしら。払ったお金と手にする結果を天秤にかけて、損した、得したと一喜一憂する。自由には違いないけど、根無し草の儚さよね」

「保護区に戻ってくるなら、いつでも迎えるよ」

首を横に振る真知子。

「いつもそういつてもらえて嬉しいけれど、わたしの故郷はお母さまと暮らした無法地帯なのよ。帰れるものなら戻りたい」

箸をとめて、黙って真知子を見つめる保夫。

「どうかしたの？」

保夫が箸を置き、胸ポケットから端末を取り出す。

「この写真を見て欲しい」

端末のモニタには、古びた木造の建物が写っている。

「この建物に見覚えはないかい？」

「いいえ、知らない」

「そう、知らないならいいんだ」

「もしかして、わたしが生まれ育った旅館なの？ 旅館の外に出たことがないからどんな建物か知らないのよ」

「実は、交流会で博多に行った時、駅裏に広がる無法地帯を案内してもらったんだ。この旅館は、その時撮影したものだよ。もしかしたら、真知子さんが住んでいた旅館かもしれないと思ってね」

端末をしまう保夫。

「何を隠しているの。それだけじゃないんでしょ？」

「何も隠してないさ。そういえば9歳の孫に、うっかり鶏の水炊きの話をしてしまって、食べたいとねだられてねえ。保護区では食べられないと分かると、自由区に出て、料理人になる。区長にはならないと言い出して困ったもんだよ」

「あら、こちらに出てくるならわたしが面倒見るわ。今では、わたしもそれなりの暮らしをしているのだもの。頼ってくれて構わないわ。ううん、頼りたいのよ」

「そういつてくれると助かるよ。何しろ、わたしの家族はみんな保護区にいるものだから、頼る人がいなくてね」

「実現したら保夫さんの孫に会えるのね。楽しみができたわ！」

立ち上がり、鍋を覗き込む真知子。

「鶏肉も無くなったことだし、そろそろ野菜を入れましょうね」

大皿に残っている茹でた白菜としいたけを鍋に入れていく真知子。

「もしもお母さまが生きていたら、いいえ、そんなことはありえない。許されるはずがないもの

」

沈黙が流れ、鍋が煮えるぐつぐつという音だけが響く。

保夫が、先に口を開く。

「確証がないから黙っているつもりだったけど、真知子さんの母親が生きていたという噂がある。でも……」

「酷い目に遭ってたのね。そうなんでしょう？」

「旅館の人の噂話だから、どこまで本当か分からない。それでも聞くかい？」

「ええ、話して、お願い」

「真知子さんがいなくなった後、雄馬という人は、お母さんを旅館の奥に閉じ込め、暴力を振るっていたらしい」

「殺されてしまったの？」

「いや、真知子さんを失って失望したのか、雄馬という人は仕事に身が入らなくなり、権力を奪われ、無法地帯を追われたらしい。出て行く時、真知子さんのお母さんを連れ出したらしいんだ」

「雄馬さまがお母さまを！」

「二人がどこで何をしていたのかは分からない。ただお母さんだけが数年後に戻ってきて、無法地帯の路地裏に住み着いたらしい。無法地帯の住人や、外から来たお客を占って生計を立てていたそうだよ」

「お母さまが生きていたの！ ああ」

涙をぬぐう真知子。

「この地獄から娘を逃すことができた。それだけでわたしは幸せなんだと、いつも言っていたそうだよ」

「お母さま！ 今すぐ会いに行かなくちゃ！」

立ち上がる真知子。首を横に振る保夫。

「残念だけど、3年前に亡くなったそうだよ」

椅子に座り込んでしまう真知子。

「一目会いたかった。どうしてわたしは博多に行かなかったんだろう。探してみなかったんだろう。なんて薄情なことをしてしまったんだろう」

「真知子さんが無法地帯に戻って、自由を奪われたら、命をかけて逃がしたお母さんが悲しむよ。戻らなくてよかったんだ」

「でも、だけど、今なら、今のわたしなら何とかできた。そうよ、今のわたしなら思い出の旅館を取り戻せる。取り戻して見せるわ」

「取り戻してどうするつもりなの？」

「母が亡くなったあの町で、供養をするのよ。わたしにとってたった一人の家族なんですもの！」

」

「供養なら横浜でもできるよ」

「占い師として成功して、いろんな人にあっただけれど、寂しさは埋まらなかった。何か欠けて

いるの。ずっと保夫さんさえわたしのものになってくれたら満たされると思っていた。でも違う。今分かった。わたしを待っているのは、無法地帯に逃げ込むしかなかった、母のような弱い立場の人なのよ。あの町に戻って、母が望んだ通り、頑張れば頑張るだけ幸せになれる場所を作りたいの。そのためなら何を失っても構わない。占い師として築き上げた全てを投げ出してもいい」

「真知子さんのことだから、一度決めたら決意は変わらない。止めても無駄なんだろうね。それなら、今までのように一年に一度というわけにはいかないけれど、博多まで会いに行くよ」

「ありがとう。いつまでもずっと待っているわ。さあ、食べましょう。ちょうどしいたけも煮えたわ」

鍋をつつき始める真知子と保夫。